

鉢眼禪師著

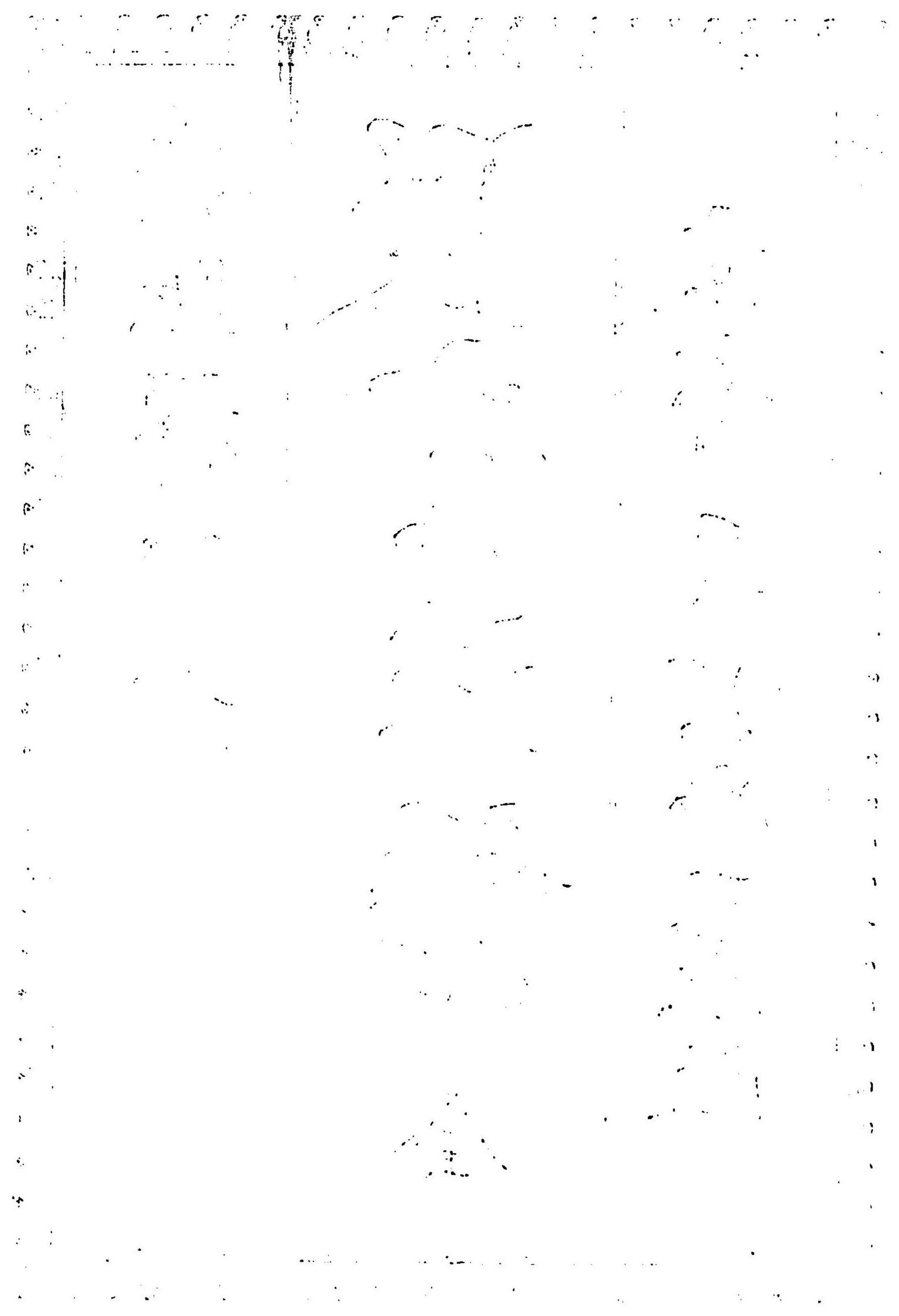
假字法語 全

京都 貝葉堂藏版

鉢眼禪師著

假字法語 全

京都 貝葉堂藏版



瑞龍鉄眼禪師假名法語

心經にいはいはく。五蘊みな空なりと。照見すれば一切の苦厄を度すと。五蘊本より空にしてなきものなる事をさとりて。その理をあきらかに。てらし見れば。一切もろくの生死の苦思厄難を度脱して。法身般若の躰にかか

五蘊といふは。色受想行識の五つなり。五つのしなことなり。唯身と心との事ありはじめに色といふは身なり。のちの四つは

本より涅槃常樂の躰にして。法身般若の智身なれとも。此

の五蘊の心は。よひゆへ。凡夫となりて。三界あ流浪るるあり。五蘊といひ

へども。すべてはたゞひとつのまよひの事なり。

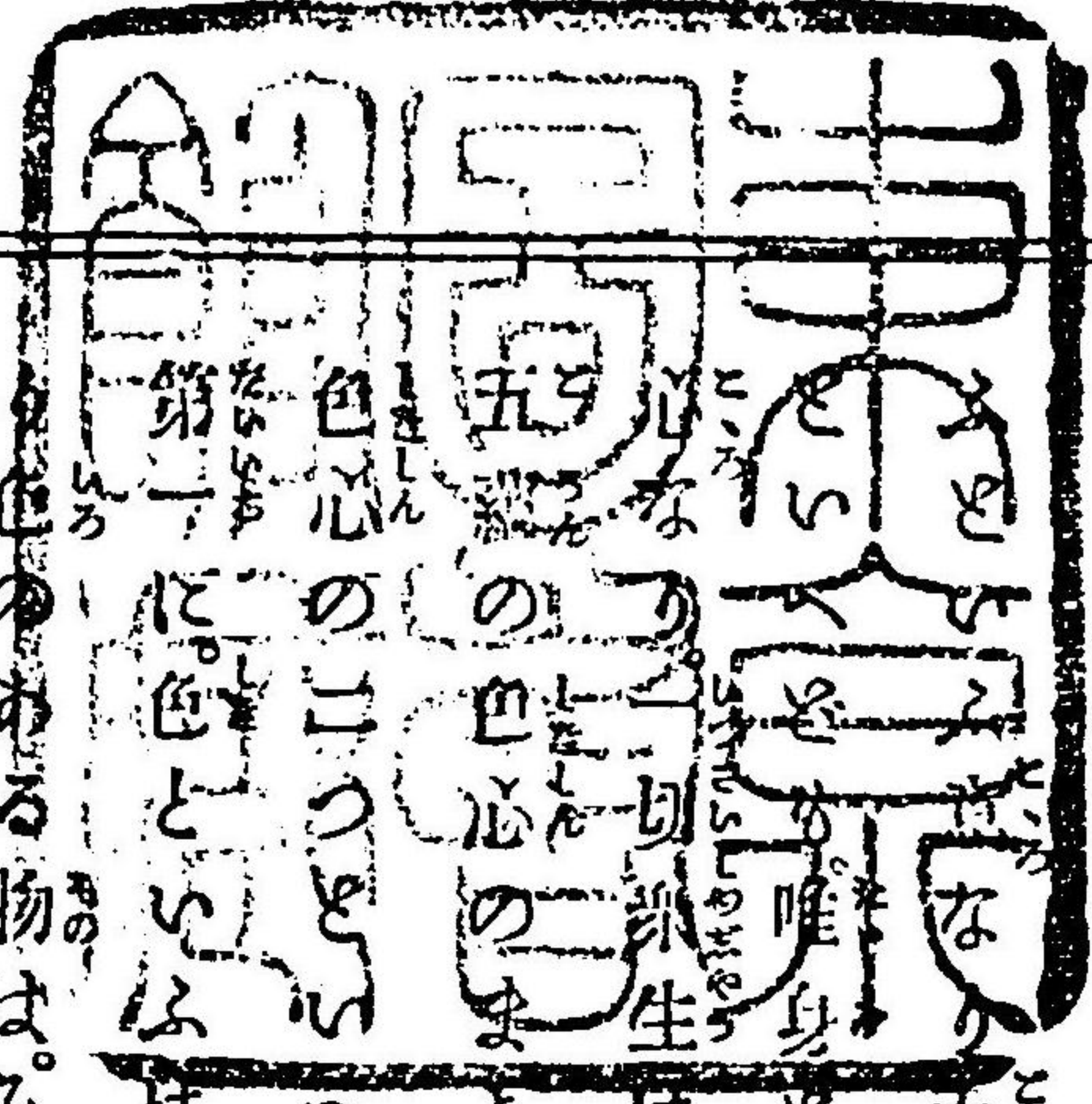
第一に色といふは。我この身なり。また世界の天地草木にいたるまで。形のお

のあり。色といふは。みな此色のうちなり。稜巖に一切衆生無始よりこのかた。已

にまよひて物とまて。本心を失ひて。物のために轉せらるといへり。此意は。一

切万法は。みな法身具如の躰なる事をしらせして。かへつて天地の中の萬物

○瑞龍鉄眼禪師假名法語



とおもひて。うの萬物の境界にまよひて。物のために。わが心を轉せられて。さ
 まくの妄想をおこすといふ事なり。また古人。法身は形骸のうちにかくる
 といへり。形骸と此身なり。此身は。本より法身の躰なれども。法身なる事を
 しらせして。我身とおもへるは。法身を見かくして。我身とおもひ。我身にまよ
 ひて。貪嗔煩惱をつくり。ふかく惡道にしづむなり。本より法身の如來なるを
 まよひて。萬物とおもひ。または我身とおもふには。二重のまよひ有。まづ一重
 のまよひは。此身は。地水火風の四大を。かりあつめて。つくり立たるものか
 り。身の内の皮肉筋骨のたぐひは。土なり。涙よだれ血などは。水なり。あたゝか
 なるは。火なり。出入の息。うごきは。たらくは。風なり。此地水火風をはなれて
 は。我身といふべきものなし。たゞ今なりとも。命をはりて。地水火風本にかへ
 りぬれば。たゞ白骨とありて。つゆほども。我身とたのむべきものなし。かゝる
 あさましき白骨を。わが身とおもひて。千生萬劫。此されかうべにつかはれて。
 地獄の業をのみつくりて。三塗しづみは。つるは。をろかにあさましき事に

あらせや。かゝる地水火風の。かりある身ある事をしらせして。我身とおもひ
 て。千萬年も。死そまじきやうにおもひ。我身ぞと。かたく執着。これ一重の凡
 夫。たまよひなり。さてまた二乗は。凡夫よりも。智慧かじこきゆへに。此身は。地
 水火風の。かりのものごと。よく見あきらめて。此身をまことの白骨のやうに
 見なし。身にをいて。ちり程も。執着の心なし。かつて。此身のために。我執我慢を
 もおこさ。貪欲嗔悲をもおこさ。いつはりへつらひもなく。ねたみそしり
 もなし。かくのごとく。のさとりは。ひらけぬれども。いまだ。此身の。法身如來を
 る事をしらせ。これによりて。世尊。小乗とて。大にきらひたまへり。かの法身の
 當躰を。さとらざる故に。二乗の智慧にては。佛の内證。菩薩は。境界は。いまだ夢
 にも見ず。これまた二乗の。一重のまよひなり。さきの凡夫のまよひと。ともに
 は。二重なり。二乗は。法身にまよふ事。一重。凡夫は。法身にもまよひ。また二乗の
 さとりし處にもまよふ故に。二重のまよひなり。菩薩は。凡夫と二乗との二重
 のまよひをこえて。此身を。そなはち。法身如來と見たまふ。これを。心經には。色

卽是空。空卽是色と説たまへり。色といふは此身なり。空といふは眞空。眞空は
 法身。法身は如來の事なり。さては此身そなはち法身。法身すなはち此身とい
 ふ意なり。二乗は。地水火風。本より法身の躰なる事としらせして。地水火風は。
 非情の物なりとおもへり。菩薩の眼にて見たまふ時は。地水火風。みち法身の
 眞躰なり。此故に楞嚴には。性色眞空。眞空性色と説たまへり。色といふは。地の
 事なり。性といふは。此地は本より。法性の躰あるゆへに。性色といふ。性色なる
 ゆへに。そなはち眞空あり。また同經に。水を性水眞空。眞空性水ととき。火を性
 火眞空。眞空性火ととき。風を性風眞空。眞空性風と説たまへり。これもはじめ
 の地のごとく。水そなはち法身。法身そなはち水。火そなはち法身。法身そなは
 ち火。風そなはち法身。法身そなはち風といふ意なり。かくのごとくなれば。地
 水火風は。もとより地水火風にあらせ。法身眞如の妙躰あるを。二乗と凡夫と
 は。まよひて。地水火風とおもへり。もし地水火風。本よりほとけなる事を。さど
 りぬれば。我此身は。はじめより法身なるのみにあらせ。天地虚空。森羅萬象にい

たるまで。みなあどくく法身の妙躰あり。此さどりのひらけし時を。諸法實
 相ともいひ。草木國土。悉皆成佛ともいへり。草木國土のみにあらせ。虚空とい
 たるまで。法身の躰なるを。まよひて虚空とおもへり。此さどりのひらくる時
 虚空とおもひしも。きえて。萬法一如のさとりとなる。このゆへに。楞嚴には。一
 人眞を發えて。源に歸すれば。十方の虚空一時に消殞せととき。圓覺經には。無
 邊の虚空。覺に顯發せらるるともいへり。禪家には。大地平沈し。虚空分碎ととい
 へり。また極樂を黄金の地ととき。たまふも。此事を凡夫のために。名をかへて
 とかれたり。此さどりをひらきて見れば。我身は我身ながら。本より法身。此躰
 おして。生れたるにも。あらせ。生れざる身なれば。死するといふ事もなし。これ
 を不生不滅といひ。または無量壽佛といふ。生ると見。死すると見る。これを
 まよひの夢とあづく。我身そでに。そのごどくなれば。人の身も。そのごとし。人
 間。そのごどくなれば。鳥類畜類。草木土石まで。みなまからせといふ事なし。水鳥
 樹林。念佛念法。念僧の聲を出せと。彌陀經に。とき。また十方の諸佛。廣長の舌相

を三千大千世界に出して法をどきたまふ。のたまひしも。此時の事なり。法華經の中に諸法は本よりこのかた。つねよとのづから寂滅の相といひ。または法は法位に住して。世間の相は常住なりと。どかれたるも。みな此さどりのひらけたるを。のべられま處なり。よくく坐禪工夫して。かゝるさどりにかなひ。色蘊のまよひをこゑて法身實相の躰にかなふべし。

第二に。受といふは。納領を義とぞとて。ものをうけおさむる事あり。これは眼耳鼻舌身の五根に。外の六塵の境界をうけおさむるをいふ。眼には色をうけ。耳には聲をうけ。鼻には香をうけ。舌には味をうけ。身には觸をうけ。おさむるなり。此受といふには苦樂捨の三受といふ事あり。まづ苦受といふは。眼耳鼻舌身の上に。このまざるくるしき事をうくるをいふ。樂受とは。眼耳鼻舌身をいて。こゝろよくたのしみある事をうくるをいふ。捨受とは。舌にもあらず。樂にもあらずる事と。うくるをいふ。たとへば。道を行に。手をふりて行やうなる事は。苦にても。樂にてもなし。そのごとく。目に見ても。何ともなく。耳にきゝ。

口にあぢはひても。何ともなきやうの事をみか捨受といふ。衆生は。この苦受樂受にまよひてくるしき事は。目にも見じ。耳にもきかじ。とおもひたゞ樂なる事を。目にも見。耳にもき。鼻にもかぎ。口にもあぢはひ。身にもふれん。とばかりおもふ。故に。人をなやまし。我身をくるしめ。ぬそみもし。僞りをいひて。物をむぎばり。魚鳥の命ともたち。世界のさまたげともなる事を。たくみて。日夜に地獄の業をつくるなり。されは樂をうけん。とおもふ。一念のまよひの意より。無量のくるまみを。生るるあり。世上のぬそみをするもの。酒をのみ。さかなをくひ。婦欲にふけりて。遊女などを愛し。衣裳までに。さらをつくさん。とおもふ。わづかの樂とむさぼる心より。ぬそみをし。いつはりをいひ。つゐにその惡あらはれて。半獄にいり。せめにあひ。そ乃身命をほろぼす。すこし乃樂をもとむる心より。これりも。とめあるは。みか苦なり。と。古人のいへるは。この意なり。たとへば。夏の虫の火に入がごとく。淵の魚乃餌をむさぼるに似たり。露ばかりのむさぼりも。とむる心故に。あたら身命をほろぼそなり。一百三

十の地獄の苦。三品九種の餓鬼飢披毛戴角の畜生のそがた。弓箭刀杖の修羅のありや。一つと去て。むさぼりもどむる心よりねこらざるくるしみはなし。一滴のあまき樂をうけんとして。萬劫のからき苦をうくる。おさましき迷ひにあらせや。また此苦とおもひ。樂とおもふ事は本より苦も苦にてはなく。樂も樂にてはなけれども。まよひてみつから樂とおもへり。そのゆへはいかにといふにとびからそ。いぬ野干などは。牛馬などの死してくさる、を見るか。また人などの死して。た、る、を見ては。これをたぐひもなきものぞとおもふ故に。まづ眼にこれを見てよろこび。鼻にかぎ。口にあぢはひ。手足につかみては。まそく、よろこびて。これを第一に樂とおもへり。人の上よりこれを見れば。むさくけがらは。まき事かぎりあし。もしか、るくされるものを。人にまゐてくはしめば。そのくるまき事。たぐひあかるべし。人にくはしむれば。かほどにくるしきくされるものを。とびからそは。かへつて樂とおもひて。むさぼりくらふ。これ樂には。あらざれども。それ心をろかに。いやしくして。苦を樂ぞとお

もへるかり。人間の樂とおもふ事も。そ乃ごとし。をろかある心故に。妻子女は。ぼれ。財寶にまよひ。魚鳥をくふて。たのしみとぞ。佛菩薩より。これを見れば。人の上より。とびからそを見るよりも。なをあさまし。これをもつて。をしは。かれば。まどへる人の。樂とれもふは。苦をもつて。樂とおもへるあり。また人の大罪などをなせし故に。おほやけのいましめにて。その罪人の子やつまを。目の前にて。ころしつ、料理て。これをくはしめは。目に見るも。口にくふも。さこそはくるしかるべき人の。魚鳥をくふも。ろのごとし。さどりの眼より。てらし見れば。魚鳥も法身の如來にして。もどより諸佛と一躰あり。また一切衆生を諸佛菩薩は。同躰の大悲故に。一子のごとく見たまへり。か、る一切衆生なるを。まよへる凡夫のあさまし。さは。よきさかあよとて。肉をさき。骨をくだきて。のみくふて。大に。よろこぶあり。さまを佛の眼より見たまへば。さながら鬼に。ことならせ。わが子のくびをきり。肉をさきて。目に見ても。よろこひ。鼻にかき。口にあぢはひて。かへつて。これをよろこびとぞ。これを顛倒の凡夫といふ。か、る

しじぎを樂とおもへるはまことば樂にはあらず。これ大なるくるしみなり。かくのごとく。苦と樂との二つの間にまよふをば第二の受難とあづけたり。三界流浪の凡夫のならひはすべてこの苦樂の間をのがる、事あたはき。そのゆへは。さく花を見て樂とおもへば。ちる時はやがて苦なり。出る月を見てたのしめば。入山の端はまたかなし。逢事をよろこべば。わかればかへつてうれひなり。さかへたるをたのしむ人は。おとろふる時またくるしむ。まづしき人は。なきとくるしむ。富る人は。あるになやまさる。へつらふもくるしみなれば。おどるもげにくるしきわざ。こひしきも苦なれば。うらめしきもまた苦なり。大なるかな苦樂の二受。三界一切の衆生。その中におぼれて。つゐに出る事。あたはき。生きるを生苦となづけ。年よると老苦といふ。やまひは病苦にして。死するは死苦あり。男子にも苦あれば。女人にも苦れば。農人も苦なれば。諸職もこれ苦なり。奉公も苦あれば。半人は。なを苦なり。臣下もくるしければ。君王もまぬかれがたし。在家のみくるしきにあらず。出家もまたくるし。その

中に。そこしくるしみの。かろくして。やそめるを。まよひて樂とおもへるなり。たとへば。おもき荷物になへる人の。おろして樂とおもふがごとし。またつよくわづらひし人の。いねて樂といふがごとし。別に樂といふべき事は。かけれども。苦のやそまりたるを樂とおもへり。また酒を。れみ。さかなを。くひ。欲などに。ふけりて。これを樂とおもへるは。たとへば。かゆきかさを。わづらふ人の。火にて。あぶり。湯にて。あらしめて。これを樂とおもふがごとし。かゆきは。いたさより。はましなれども。かゆきも。げには。くるしみなり。あぶるか。あらふか。して。これを樂とおもへるは。苦を樂とおもへるあり。まことば。かさを。か。ぬ人の。あぶりて。こ。ろよしと。おもふ。さ。か。さまの。樂は。かつて。なきこそ。げには。樂なり。けれ。此。こと。は。りを。よく。さ。とりて。苦樂の二つを。こ。ぬれば。第二の受難のまよひを。はなれて。涅槃の大樂に。いたるなり。第三に。想といふは。思想とて。人々の。心中に。日々。夜々。に。おこる。妄想なり。ひるは。妄想となり。夜は。夢となる。こ。な。人。夜。の。夢。ばかり。實なき。いつ。は。りの。ものに

て晝おもふ事は。みなまことなりとおもへるなり。これ大なるあやまりなり。まよへる人のおもふ事は。ひるおもふ事も。夢も。夢も同じくして。すべて跡なき妄想なるを。しらすして。實とおもへるなり。妄想といふは。妄は虚妄とて。實にはその跡なきものにて。あるに似たるものを。妄といふ。たとへば。かけぼうしのかたちに似。夢のうつゝににたるがごとし。すべてみななき物なれども。夢のうちにはあるにたり。かけぼうしはなきものなれども。月日やまたは。どもし火のひかりにむかへば。やがて形にかげいできて。形ゆけば。かげもゆき。かたちとゞまれば。かげもとゞまる。鏡や水にうつるかげも。そのごとく。木よりきはめてなきものにて。たしかにあるににたるなり。人の妄想も。そのごとく。まことは。すべてなきものなれども。おもひいだせるその時は。たしかにあるににたるなり。にくしとおもひ。かはゆしとおもひ。うらめしきも。ねたましきも。こひしきも。ゆかしきも。みなことごとく。妄想にて。夢見る心にかはる事あり。我本心のうちには。かゝるさまざまの妄想の本よりたゞて。あき事は。鏡の

きよきがごとく。また水のそめるにあたり。此本心をさどらざるゆへに。その本心の上。にうつる妄想の。かげを。とゞめて。まこと、おもひて。これを。かたたく。執着する故に。その妄想いよく。さかんに。なりて。まよひまそく。ふかきあり。にくしとおもふも。かはゆしとおもふも。みなみづからが。おもひなしなり。此おもひなきのと。あるを。妄想となづけたり。にくきも。かはゆきも。おもひなしといふ。うのいはれは。たゞいま。にくしかはゆしと。かみふ人も。いまだしる人にも。ならざるさきには。にくも。あく。かはゆくも。なし。は。じめて。ちかづきになりぬれども。かりそめの。まゐる人にて。いまだ。したしまぬ。その間は。猶いまだ。そのしななし。次第く。になれ。したしめば。我心に。あへる人には。したしみの心。ふかくして。かはゆき心。いでくるなり。事に。こそよれ。しな。にこそよれ。もし愛執の道。を。なれば。我命にも。かへぬ。ばかりに。いと。ねし。さの。まさるも。あり。かやうに。いと。おし。き心。になりぬれば。いと。ねし。き。が。必定にて。何とおもひめ。ぐら。せ。ども。いと。おし。き心。にて。にく。き。と。ころ。は。さら。になし。さて。は。はや。

いとおしきに。きはまりて。たとひ百千万劫をふるども。この心はかはるまじきかとおもへば。さはなくして。そのしたしき中なれども。何事ぞ心にたがふ事ありて。あらうひをちして。けんくは口論にねよぶか。あるひは愛執の道なとにて。よそに心のうつりちどれば。はじめいとおしかりし心のふかきやと。今のにくみもまたふかし。そのうらみにくみのふりきあまりには。つねに身命をうしなはんとおもふまで。にうらみもにくみもふかきあり。かゝる道理をもつて。おしはかれば。いとおしかりしも妄想にして。夢のごとく。偽りなるゆへに。にくしとおもふもまた妄想なり。もしいとおしとおもひし心いつはりには。あらざれば。しばらくの間に引かへて。にくしとはおもはじ。にくしとおもふがまことならば。はじめいとおしとおもはじ。いとおしきもにくきも。まことは妄想なる故に。その心さだめなく。夢のごとくにうつりかはるなり。かゝる妄想の夢にばかされて。むねをこがし。身をなやませ。つよきは命をもうしなふは。あさましきまよひあり。いとおしきも。にくきも。かくのご

とく妄想おれば。おしきもほしきも妄想なり。あるひはうらみ。あるひはねたみ。あるひはよろこび。あるひはかなしむ。いづれか妄想あらざるや。この妄想の夢にまよひて。たかきもいやまきも。ものをしれるもしらざるも。老たるもわかきも。男といひ女といひ。地獄乃たねをつくらぬはなし。この妄想を。夢ぞとまらざる故に。無始久遠のいにまへより。今生今日にいたるまで。ろの輪廻たえせして。地獄におち餓鬼となり。畜生にむまれ。修羅となる。されば佛になるも地獄におつるも。その源をたづぬれば。此妄想の。あるときとなり。よくく眼とつけて。此妄想の。わざはひをなほ事をしり。また妄想の夢のごとくにして。至躰なきものなる事をあきらむべし。世上のをろかなるもの。ぬそみをして。王法乃いましめにあひ。今生よては。はぢをさらし。來生はながく地獄におつるも。物とむさぼる。一念の妄想なり。また人むほんなどをたくみて。天下國家を。くつがへさんとはからひて。その身もふかき罪にいり。妻子兄弟眷屬まで。にたへがたきくるしみを。見ざるも。たゞ一念の妄想あり。かゝるむ

ほんなどをたくまんとおもひいだす最初の一念は。たばこのけふりなごの
 ごとくにしてきはめてかそかなるたい一念の妄想あり。此一念の妄想をわ
 ざはひの本ぞとしらせして。ひたどおもひかさぬる故に。はては一天にみつ
 る雲のごとくにして。いよくおもひやめがたし。その最初の一念のとき。や
 れ妄想よと。あきらめしりてむつの内にてけさん事は。何よりもつてやそき
 事あり。合抱乃木は毫萌よりはじまるどて。五抱も十かひも。まはるほどの大
 木あれども。その木のはへ出る時は。はりのさき乃ごどくなる。そこしばかり
 のさざしなり。そのさざしのいづる時は。ゆびをもつてかろくぬきそつるも
 やそきあり。もし大木となれる時は。たとひ千人萬人のちからにてもたやそ
 くはぬきかだし。妄想もまた。これににふり。最初の一念の時。はやくおもひそ
 つべし。また妄想れわざはひをなそも其ごどく。ひたとれもひかさねて。大に
 國家のあたどもある時は。そのねづらひおほきゆへに。大木のごとしといふ
 といへ共。大木のごとくに。かたちありて。のぞきがたきものにはあらせ。たと

ひかもひかさねたる。妄想あり共。はらさんとおもひて。おもひそつる時は。日
 此出て闇のはる、がごどく。さらに造作はなきものなり。これを千年の闇室
 に燈火をともそにたどへたり。やみいさしどて。ともし火をともし時。はれが
 たきものにはあらせ。妄想もそのごとし。一念心をひるがへせば。無始久遠の
 妄念も。刹那があひだにはる、なり。このごとは。りをわきまへて。夢の妄想と
 おもひすて、ごどりれ心にもどづくべし。この妄念をすてせして。ひたどか
 もひかさぬれば。衆生の事は。さてをきて。今生にて鬼となり蛇となる。計ため
 しおほし。女をとりわけ罪のふかきといふは。妄想の心をおもひそてかぬる
 故なり。百億の三千大千世界も。衆生の妄想よりをこり。一百三十六の地獄も
 人々の妄想より作りいだせり。我ど妄想の火をおこして。百千萬劫その火に
 身をこがすは。あさましき凡夫のありさまなり。此妄想をおもひそて、第三
 の想繼をこえて。ごどりの田地にいたるべし。
 第四に行といふは。行は遷流を義とそとて。我心の生滅して。うつりかはるを

いふなり。こゝろに妄想のおもひあれば。その心刹那も。どいまる事なくしてしきりあうつりかはるなり。たとへば水のなかれて。しばらくもどいまらざるがごとく。燈火の刹那にきえてまだ、きの間も。どいまらざるにたり。人々れ。朝よりゆふべにいたるまで。どやかどかおもひつゞて。うつりかはる處を。意をつけてよく見るべし。さながら電光石光のごとく。刹那にうつりかはりて。どいまる事は。さらにあし。一切有爲のまよひの法は。みなこれ行蘊の遷流なれば。無常にして。念々あうつり。生滅時々におかして。まばらくもどいまらせ。たとひあらし生滅の心は。をろかなる凡夫の心にもしらるれども。微細の生滅の念々にうつりかはる事は。凡夫二乗の眼には見え。その心にかくのごとく。生滅あるゆへに。心より生老る諸法なれば。萬法もまたうつると見る。圓覺經に。雲はやければ。月はこび。船ゆけば。きしうつると。説たまへるは。此意なり。雲のゆく事は。やければ。月のうつりは。あぶがごとく。舟の行事そみやかなれば。岸も山もうつるにたり。これ山のうつりうつりごとくには

わらせ。我のりたる。船の行故なり。我心の雲は。やき故に。真如の月は。こぶと見る。諸法は。本より實相にして。常にをのづから寂滅の相あれども。三世うつりかはると見。四時のどいまらざるし。かを見るは。みな行蘊のまよひなり。涅槃經に。諸行無常。是生滅法。と。きたまへるは。此事なり。諸行とは。そなはち行蘊なり。行蘊の生滅遷流故に。一切方法うつりかはりて。刹那もどいまる事なきをいふ。此諸行の有爲生滅のまよひ。ことごとく滅しを。はらざれば。寂滅無爲の涅槃の大樂。あらはれ。諸行の生滅。滅しを。はる時。寂滅の法現前して。方法一如。諸法實相の涅槃の妙樂。現前するを。生滅滅已。寂滅爲樂。と。きたまへり。かくのごとく。我身我心も。又一切の方法も。常住法身の射にして。本より生滅は。なきものなるを。此行蘊のまよひ。故に。真如の射を見つ。け。せ。して。三界生滅の方法。と。おもへり。行蘊のまよひ。を。こえぬれば。まづ我心常住にして。うつりかはる事なし。我心うつりかはらざれば。諸法も。又常住なり。されば。我本心のうつりかはらざる事は。たとへば。鏡の本射にあたり。明らかなる鏡の中に。終

日かげのうつるを見れば。天をうつし。地をうつし。花をうつし。柳をうつし。人間をうつし。鳥獸をうつし。さまざまの色彩はりしきことなりて。刹那もどまらざるにたれども。その鏡の本躰は。鳥獸にもあらず。人間にもあらず。柳にもあらず。花にもあらず。地にもあらず。天にもあらず。たゞ明々として。くもりなき鏡の全躰あり。我本心の方法をうつして。その方法の差別にもあづからず。生滅にもかつて。うつらざる事を。鏡のたどへにてしりぬべし。まよへる人は。心中にうつる影のみを見て。本心の鏡を見る事。あたはせ。圓覺經の中に。六塵の縁影を。自心の相とせ。と。きたまふは。此事なり。さてまた鏡にうつる。もろくのかげは。全躰虚妄にして。なきものあれば。その影をはらひすて。はじめて鏡と見んとおもふは。又ははめて。悪人のありさまなり。花や柳のかげは。うつらはうつしなから。去來もなく。色香もなき。明鏡の全躰とよく見るべし。これを法身となづ。眞如といふ。眞はいはく。眞實にして。僞妄にあらざる事を。あらはせ。如はいはく。如常にして。變易なき事を。表すと。唯識論に

いへるは。此眞如の妙躰なり。また金剛經には。如來といふは。來るところなく。また去所なしと。きたまふも。此法身如來の事を。のべられたり。我本心と。にそのとどくなれば。萬法もまたそのとどし。萬法を。天地森羅萬象と見るは。これうつれる影なり。萬法の全躰は。これ明鏡なり。影にまよふを。凡夫といひ。鏡を見るを。聖人といふ。たとへをとりて。これをいはく。金にてさまざまの物のかたちをつくりたるがとどし。その形より。これを見れば。鬼はねそろしく。佛はたつとく。老たるはかたちしはみ。わかきはかほうるはし。つるははぎあかく。かもはあしみ。かかし。松はなをく。をどろはまがり。柳はたをやかに。花はみやびやかなり。金のかたより。これを見れば。鬼もこがね。佛もこがね。男女の差別もなく。君臣の高下もなく。つるのかがきも。金なれば。鴨のみじかきも。金なり。花も柳も。松もをどろも。たゞ一躰の金にして。露ばかりも。差別はたてがたし。萬法もまたそのとどし。眞如のかたより。これと見れば。たゞ黄金のことにして。毛頭も差別なし。萬法は。かたより。あれを見れば。さまざまのかたち

わかれたり。衆生はそのかたちによまよふ。諸佛はその真如をさとる。真如の躰の黄金をさとれば。さまくの差別のかたちはあるにまかせて。たゞ平等にして一味なり。さらふべき鬼もあく。たつとむべき佛もなく。したしむべきものもなきゆへに。うとんせべき人もさらになま何をかきらひ何をかこのみ。たれとかそまじり。誰をかほめん。うらみもなく。ねたみもなし。一切もろくの煩惱は。闘争る事なけれども。そのづからたえてさらにあしたへは日の出たる時。闇との予かんとはせざれども。そのやみをのづからあきがご。煩惱をのぞきまよひをさらむとはせざれども。唯一の實相にして。まよひは之のづから不可得なり。うのかみ。二祖これを得て。安心し。六祖これをさとりて。衣をつたふ。金剛には。三世不可得ととき。法花又は。諸法實相といふ。これ表裏のとばあり。三世不可得あるゆへに。諸法實相なり。諸法實相なる故に。三世不可得なり。妙なるかき。如來の金言。心をといめて見るべきなり。また本心の生滅去來をはなれて。常住なる處を。よくさとりぬれば。心中にうつるかげもま

た常住不滅なり。そのゆへいかにといへば。森羅萬象の差別。古往今來の生滅のかげは。本よりこれと妄なる故に。きたる事なく。またさる事なく。生る事なく。滅する事なし。そでに生滅去來あき時はもろくの差別もまたある事なし。鏡の影もつて。そのことほりを心得べし。かげのはじめてうつるを。その時。其影鏡の中に入來るにあらせ。はじめそでに入さるらざる影なれば。今また出さるべきことほりなし。影に本より出入去來あき故に。鏡は本より鏡ばかりにして。つゝにかげになりたる事なし。影にならせして。かげをうつそ鏡なれば。森羅萬象歴然として。たゆる事なし。これうつそともいひがたく。またうつさぬともいひがたし。金にてつくれる。いろくのかたちの鬼にもあらき。また佛にもあらせして。また鬼の形ともなり。佛のかたちともなるがごとし。あるともいひがたくなし。ともいひがたし。これを如幻の萬法といふ。幻とは術道にてもろくのいきものなどを。つくりいだすをいふ。術道にて。つくりいだせるいきものなれば。あるともいひがたく。なしともいひがたし。あ

きものといはんとすれば眼前に鳥けだものとなりてとびはしる。あるものといはんとすればまことの鳥けだものにはあらせ。あるひは木のきれ、手巾などを。術道にていきものとなしたるあり。いま此三界の天地方法ならびに人々の身にいたるまでもそのごとし。一心の本躰よりこれを見ればまことに本来無一物にして。一塵をも立せざる。實際の理地なる故。諸佛もなく。衆生もなく。いにしへもなく。今もなく。天にあらせ。地にあらせ。自にあらせ。他にあらせ。法界平等一相なり。金にてつくれるものと金のかたより見るがごとし。これを心真如門といふ方法のかたよりこれを見れば。天地日月位をわかち。森羅萬象しなごきありて。花はつね。紅柳はいつもみどり。火はあつく。水はひや、かに。風はうごき。土はしづかに。松はなをく。とどろはまがり。鶴はしらく。鳥はくろく。天はたかく。地はひさく。佛あり。衆生あり。我といひ。人といひ。春夏秋冬のありく。青黄赤白のいろく。ひとつとして亂事なし。金を見せしてさまくのそがたより見るがごとし。これを心生滅門といふ。一切も

ろくの衆生は。この萬法の諸相にまどひて。目に見てはむさぼり。耳にき、てはあらそひ。鼻にかぎ。舌にあぢはひ。身にふれて。そのものごとくに。貪着して。さらに此万法の夢幻泡影のごとく。鏡象水月のごとくにして。幻化虚妄なる事をしらす。胎卵濕化の四生をうけ。生住異滅の四相にうつされ。五欲の境界に着して。六根の罪業をつくり。千生萬劫。地獄餓鬼のはのをに身をこがし。生々世々。畜生修羅のくるしみにまづみ。あるひは人間に生れども。四大和合の色身を。我とおもひ。六塵虚妄の影を。心として。生老病死念々にをかし。春夏秋冬時々うつり。みどりの髪たちまちしろく。花のかんばせつ。ぬにしほ。見て朝のつゆときえ。夕のけふりとのぼる。かゝる無常轉變の浮世。電光石火。我身。まばらくもと。まる事。あたはせ。刹那もしづかなる事なくして。水の時々にあがる、がごとく。ともし火の念々きゆるに似たり。これまさしく。行纏のそがたなり。しかるも衆生の三界に流轉するは。万法の幻化をしらす。まてその夢幻の六塵に貪着して。十惡五逆の幻業をつくる故に。地獄餓鬼の幻

果をうく。我身本より幻げんさればその心こころもまた幻げんなり。その心すでに幻げんなれば。その煩惱ぼんごうもまた幻げんなり。煩惱本より幻げんなるゆへに。その悪業あくごうもみな幻げんあり。悪業あくごうことごとく幻げんなれば。三塗さんづの苦果くくわもこれ幻げんなり。三塗さんづそでに幻げんされば。人間にんげん天上てんじやうもまた幻げんあり。三界さんがいの生死しやうじ幻げんなれば。四生ししやうの因果いんぐわも。ことごとく幻げんにして。一大法界いっさいぽうがいのその中に幻げんにあらざるものある事なし。衆生しゆじやう幻業げんごうをつくりて。幻げん苦くをうくるゆへに。諸佛しよぶつ幻慈げんじをたれて。幻法げんぽうをどき。幻苦げんくをそくつて。幻樂げんらくをあたふ。これを涅槃ねはんの大樂だいらくといふ。この大樂だいらくをうくる事は。その幻法げんぽうをしるゆへり。衆生しゆじやうは幻法げんぽうにまよふ故ゆゑに。幻業げんごうによりて。幻苦げんくをうく。諸佛しよぶつは幻法げんぽうをさとる故ゆゑに。幻苦げんくを脱だつして。幻樂げんらくとなす。幻法げんぽうにまよふ衆生しゆじやうは。夢幻げんげんの生滅しやうめつにばかされて。生死しやうじ無常むじやうの行苦ぎやうくを受うて。行蘊ぎやううんの遷流せんりうとあす。幻法げんぽうをさとる諸佛しよぶつは。夢幻げんげんの生死しやうじを涅槃ねはんとなして。行苦ぎやうくを滅めつして。常樂じやうらくにのぼる。いかんじてか生滅しやうめつの行苦ぎやうくをもつて。涅槃ねはんの常樂じやうらくとなす。とならば。これ別に造作ぞうぞくあつかるあらざ。たい萬法まんぽうの遷流せんりう。生死しやうじの法ぽうを徹底てつてい夢幻げんげんとしればなり。このゆへに圓覺いんかくにいはいく。幻げんとし

ればそなはちはなる。方便ほうべんをなさざ。幻げんをはなるればそなはち覺かくなり。また漸ぜん次じあしと。そのゆへに。いかんとなれば。三界さんがい萬法まんぽうそでにこれ幻げんなるゆへに。幻げんは本もとより生しやうずる事ことあし。そでに生しやうせぬ萬法まんぽうあれば。いづれの時ときか滅めつする事ことあらん。そでに生滅しやうめつ去來こらいにあづからざ。あに不生ふしやう不滅ふめつの涅槃ねはんにあらざや。そでに不生ふしやう不滅ふめつの躰たいなれば。何ぞ是非せひ得失とくしつの沙汰さたあらん。本もとより生死しやうじなきゆへに。涅槃ねはんといふも。かりの名ななり。生死しやうじにも涅槃ねはんにもあらざれば。煩惱ぼんごう菩提ぼだいのわかちもなく。衆生しゆじやう諸佛しよぶつのへだてもなし。生死しやうじのわづらひは。煩惱ぼんごうあり。煩惱ぼんごうなきがゆへに。菩提ぼだいもなし。煩惱ぼんごうもなく。生死しやうじもなければ。何をか衆生しゆじやうとなづくべき。衆生しゆじやうのさとりたるを。諸佛しよぶつといふ。本もとより衆生しゆじやうにあらざる故ゆゑに。いまさとりて。諸佛しよぶつといふべき事こともあし。されば悟さとといふ事ことは。かくのごとく。人々の本もとより迷まよひをして。たい本もとのそがたなる事ことを。たしかに見みつくるをいふなり。圓覺いんかく經きやうに。始知しやくち衆生しゆじやう本來ほんらい成佛ぶつじやうと。説とれたるこの意いあり。本來ほんらい成佛ぶつじやうとは。本もとより佛ぶつといふ意いなり。本もとより衆生しゆじやうにあらざる故ゆゑに。佛ぶつといふべきやうもなければ。本もとより迷まよひの

衆生しゆじやうにあらざる事ことをしめて佛ほとけとあづけたり。此この故ゆゑ又また生死しやうじもなく涅槃ねはんもなし
といへども凡夫ぼんぷのはかりがたき奇妙きせうのさどりの躰たいなしといふ事ことにはあら
ぞ。楞伽經れうかきやうにたとへば牛うしにあらざる馬うまの性しやうのごとく馬うまにあらざる牛うしの性しやうの
ごとしといへるはこれなり。此この意いはたとへば牛うしにあらざるといへばとて馬うまの
性しやうなきにはあらざ馬うまにあらざるといへばとて牛うしの性しやうなきにはあらざ。いま
生死しやうじ涅槃ねはんにあらざ煩惱ぼんぷ菩提ぼだいにあらざ衆生しゆじやう諸佛しよぶつにあらざといふもそのごと
し。これみな牛うしにあらざといふがごとし。かやうに生死しやうじ涅槃ねはん等の牛うしにあらざ
といへばとて不思議ふしぎ奇妙きせうのさどりの馬うまの性しやう躰たいなしといふ事ことにはあらざ。ま
たたとへば夢ゆめみる人ひとにむかひて汝なんぢが見る處ところの物は一切いっさいみなまことのもの
にはあらざ。天地てんちと見るも實まことの天地てんちにあらざ。草木さうもく國土こくどと見るもまことの草
木もく國土こくどにあらざ。我われと見人ひとと見。苦くとおもひ樂らくとおもふ。みな實まことの事ことにあらざ
といはん時とき。かの夢ゆめ見る人ひと。これを聞きて。さては天地てんちもなく。草木さうもく國土こくど我人われひともな
くして。空くうなる處ところを。さめたるまことの處ところといはんかといふにたり。それに

もあらざ。これにもあらざといふは夢ゆめの内うちに見る事ことはすべて跡あとなき妄想まうそうに
て。眞實しんじつの物ものにはあらざるに夢ゆめの心こころにはまことの物もの予よとおもひて。その物ものに
とりつきて。苦くとおもひ樂らくとおもふ。故ゆゑにその夢ゆめをさまして。さめざる時ときの眞
實まことの天地てんち世界せかいとしらしめんためあり。いま迷まよへる人ひとに向むかへて。生死しやうじ涅槃ねはんにあら
ざ。衆生しゆじやう諸佛しよぶつにあらざといへば。さては一向いっかう斷無だんむにして。空くうなる處ところをまことの
さとりといふかとおもへるは夢ゆめ見る人ひとの我われ見るところをすべて眞實しんじつにあら
ざといはひ。天地てんち世界せかい空くうにして。すべてなき處ところを。眞實しんじつのさめたる境界かいがいかとい
ふかといふにまさり。さとりて迷まよひの夢ゆめはたと一度いちどさめざればそのさとり
のありさまを。たしかに去いる事ことあたはざ。法ほう花けの中ちゆうに。如に是よ相さう。如に是よ性しやう。如に是よ躰たい。如
是よ力りき。如に是よ作さく。如に是よ因いん。如に是よ緣げん。如に是よ果くわ。如に是よ報ほう。如に是よ本ほん末まつ究きゆう竟きやう等とうと。説とくたまへるは。ま
よひの夢ゆめのさめたる時ときのそがたなり。是これを法ほうは法位ほうゐに住すして世間せけんの相さう常じやう住じゆう
といふ。また衆生しゆじやう見劫盡けんこつじん。大たい火くわ所しよ燒せう時とき。我われ此こ土ど安穩あんゑん。天てん人にん常じやう充ちゆう滿まんといへり。この意い
はまよひの衆生しゆじやうの眼まなこには劫末こくまつにありて。此この世界せかいのやぶる、時とき無間むけん地獄ぢごくより

火をこりて。初禪天までやきはるばそと見る時釋迦如來の御眼よりは此世
 界安穩にして。天人も人間もみちくして。園林もろくの堂閣種々のたから
 の莊嚴ありて寶樹には華果おほく。衆生その中に遊樂そ。諸天天鼓をうちて
 つねにもろくの伎樂をなし。曼陀羅華をふらして佛とよび。大衆に散じそ
 のほか無量のたのしみありと見たまふ。同じひとつの水なれども。餓鬼の眼
 には火と見るま。人は本のごとく水と見るま。よはざれば。三界の火宅にはあ
 らせして。清淨の淨土なれども。まよひて。三界六道と見る。餓鬼の水を火と見
 るがごとし△問ていはく。ごまかなるさやうのことはりをきけば大かたは
 その道理心得られて。我身も本より佛にして。世界もむかしより淨土あらん
 事うたがひなし。まかりといへども。有爲の世界のうつりかはるを見我身も
 生老病死にあづかる時は。生滅の行苦いまだはなれざるに似たり。いかんし
 てか。此行苦とはおかれて。不生不滅にいたるへきや△答ていはく。さやうの心
 得はこれ信解とて分別にてをしはかりて。そこしさとりのありさまを心得

たるに似たれども。いまだまことのさとりひらけざる故に。無明の夢さめや
 らせ。しかる故にそのことばりど。あらましはしりながら。夢幻の我身におい
 て。我執我慢はなれせ。憎愛是非も猶ふかし。夢幻の境界にまよひてや、も
 それば。得失利害の心をわけてして。三塗の業をつくる。みな夢中のそがたなり。
 圓覺經に。いまだ輪廻をいせずして。圓覺を辨れば。彼圓覺もまた。輪廻に歸
 そといへり。此意はいまだその心さとらせして。その分別の心をもつてかの
 さどりの圓覺を辨別し。思量すればかの圓覺もまた。輪廻となるといふ
 意なり。眞實にさとりの躰に。かなはんとおもは。一切の知解情識をそて、
 是非邪正に心をとめ。銀山鉄壁にさし向ふがごとくにして。眞實堅固の志
 をおこし。一則は話頭を提撕して。前後左右をかへりみ。寢食寒暑を忘れて
 疑ひ來り。疑ひさらば。時節因縁到來して。忽然として。曠劫以來の無明の漆桶
 を打破せんとき。はじめて長夜の夢さめて。掌を打て。呵呵大笑して。本來の面
 目をあらはし。本地の風光をあきらめ。千生萬劫の本意をどぐべし。たゞ大眞

實の心をおこさざれば。此無明とやぶりがたし。ひかし長水尊者楞嚴の清淨
 本然云何忽生。山河大地の文を疑ひて。瑠璃の慧覺和尙に問ていはく。いかな
 るか。是清淨本然云何忽生。山河大地と。瑠璃答ていはく。清淨本然云何忽生。山
 河大地と。長水言下において。桶底の脱するがごとく。忽然として大悟し。ま
 へり。これまさしく此行蘊をこえられしそがたなり。楞嚴の文の意は清淨本
 然とは。此世界は本より清淨本然の淨土なりと。楞嚴會上において世尊説た
 まひし時。富樓那尊者問ていはく。如來のたまふがごとく。此世界清淨本然
 の淨土ならば。いかにぞたちまちに山河大地もろくの有爲の相を生じて
 かくのごとく。遷流生滅するや。といふ意なり。長水そのまへは。行蘊の夢さめ
 たりし故に。此文にふかく疑ひあり。しかる故にこれをわけてとひたまへば
 瑠璃和尙の答によりて。はじめてかの夢をさまして。清淨本然の處と見られ
 しなり。ひかし僧あり。古徳に問ていはく。起滅してといまらざる時。いかに。古
 徳答ていはく。直にそべからく。寒灰枯本にしさるべしと。また自餘の古徳に

問ていはく。起滅してといまらざる時。いかに。徳答ていはく。略漢いづれの處
 か。これ起滅と。僧言下において大悟と。いへり。これみな行蘊によつて。本
 分の田地にかなへる人のありさまなり。
 第五に識といふは。是そち色受想行の四つのもどひとなりて。三界六道
 を生じて人々の身より。森羅萬象天地虚空までを生きて。まよひの根本なり。
 此識は至躰本心にて。躰には差別なしといへども。無明のわづらひある故に
 識といふ。もし無明のわづらひなければ。そなはち本心あり。識は幻夢のごと
 く。たゞこれ一心と。圭峰のたまへり。識といふ時は。幻とて。佛道をそるもの
 木のされなどを取て。いろくの鳥けだものとなそがごとし。まさしくい
 きものとありて。とびはしるといへども。木のされはもとの木のされにて。鳥
 獸とはならぬ。ならぬしてなれるやうに見る。これ佛道之力なり。識も其如
 く本心と。無明の佛道之力にて。しな變るやうに見る。れども。本心の躰は。發そ。又
 たとへば。識は人のねふりたるがごとし。ねふらざれば。夢を見る事なし。ねふ

る故にさまぐの夢を見て。いろくのなき事を。あるやうに見るなり。識もまたかくのごとし。本來の本心にて無明のねふりのなき時は。三界れもなく。六道のしなもなく。地獄もなく。天堂もなく。娑婆といふ事なき故に。何に對してか極樂ともいはん。生死本よりなき故に。涅槃といふ名もつけがたし。煩惱はじめよりおこらざれば。菩提をもとむべき事もなし。もとより衆生とならざれば。佛となるへきやうもなし。つるにまよはぬ心なれば。何をか今さらさとするべき。一切みなかくのごとくにして。いふにいはれぬめでたき本心の射なり。この處をしめてなづけて。本分の田地といひ。本來の面目といふ。此本來の面目に無明のねふり着たる處を。根本無明といふ。これまよひのはじめなり。此根本無明のねふり着し故に。さまぐの夢を見る。まづ虚空ありと見る。これそなはち夢のはじめあり。楞嚴經に。晦昧空をなるともいひ。迷妄に虚空ありともいへるは。これなり。虚空ありと見る故に。虚空の中に天地あり。天地の中に萬物あり。萬物の中に人間あり。人間の中に我あり。人あり。鳥類

あり。畜類あり。月あり。存有と見るよりして。にくきもれあり。かはゆきものあり。このましきものあり。このましからぬも乃あり。これよりして。ほしきものあり。おしきものありて。八萬四千乃あらゆる煩惱の夢を見出して。この煩惱によりて。殺生をなし。ぬそみをし。淫欲をよかし。妄語をいひ。そのほかあらゆる。身になそあしきしわざはかの煩惱にくるは。されて。つくりいだそ悪業あり。こ乃もろく。乃悪業をつくれれば。地獄か。餓鬼か。畜生か。三つの惡道におちて。無量億劫の間。さかんなる焔に身とこがされ。紅蓮。大紅蓮の氷に骨をどちられ。あるひは餓鬼道のたへがたきくるしみに身をしづめて。百千萬劫。飲食の名をだにもきかき。水にあふてのまんとすれば。水かへつて火となりて。喉をやくがごとく。乃くるしみをうくるも。みなことぐく。無明乃ねふり乃内の夢れあり。さまなり。もしまた人ありて。そ乃悪業とひるがへして。五戒十善をたもては。三惡道をのがれて。人間天上の生とらけて。來生めでたき身とひまれ。そ乃善業の高下によりて。それ。乃樂をうく。しかりといへども。是み

な三界のうちにして無明のねふり乃夢の内うちの事ことなれば樂らくといふもまこと
 乃樂らくにはあらず根本こんぽんは苦くなれどもまよひて樂らくとおもへるなりまして人間にんげん
 にも八苦はつくあり天上てんまうにも五衰ごさいありてそ乃なくるしみたねせねば意いをといひべ
 き處ところにはあらずとみやかにいとひそつべき世界せかいなりもしまた人ひとありて此この
 ことはりとあきらめて人間にんげん天上てんまう乃樂らくはたのしみにはにたれども六道輪廻ろくだうりんね
 乃うちにして有為無常うゐむじょう乃樂らくなればこれまた無明むみょうの夢ゆめの中うちのあたる樂らくぞ
 と心得こころえて大眞實だいしんまつの信しんをねこして坐禪ざぜん工夫くふうをあそ時ときぞ乃心こころ乃うちに善惡ぜんあく無
 記まじ乃三性さんじやう乃しなおこる善ぜんといふはよき事ことをおもふ心こころ惡あくといふはあしき事こと
 の心こころにうかふをいふ無記むまじといふは善ぜんにもあらず惡あくにもあらず茫然ぼうぜんとして
 うかくとしたる心こころあり此三このみしきの念ねんをこりてやむ事ことあしあるひは惡事あくま
 をおもはざれば善事ぜんまをおもふ惡事あくまをおもはざれば惡事あくまをおもふもしそこ
 しの間あひだおと善念ぜんねんも惡念あくねんもおこらざれば無記むまじとて何なにともなき茫然ぼうぜんとしたる
 心こころにてうかくとしてあるものなりその惡念あくねんは地獄ぢごく餓鬼がくし畜生ちくじやうのたね善念ぜんねん

は人間にんげん天上てんまう乃たね無記むまじはいまだ善惡ぜんあくのわかち乃なき愚痴無明ぐちむみょうのそがたな
 りかやうに善惡ぜんあく無記むまじの内うちをばなれざる間あひだはいまた坐禪ざぜんの熟まじせざる初心しんしんれ
 人のありさまなりかゝる念ねんのおこるにもかまはざいよくこゝろざしを
 ふかくして退屈たいくつの心こころなくひたと坐禪ざぜんする時は坐禪ざぜんの心こころちと熟まじして時ときとし
 て善念ぜんねんもおこらず惡念あくねんもまたおこらずうかくとしたる無記むまじの心こころにても
 なくしてその心こころそみわたりてとぎ立たてたる鏡かがみのごとくそみわたれる水みづのご
 とくなる心こころそこしの間生あひだしやうせる事ことありこれは坐禪ざぜんの心こころもち露つゆほどあられはれ
 たるあるしなりかやうの事ことあらん時はいよくそゝみて坐禪ざぜんをべしひた
 どをこたらせ坐禪ざぜんすればはじめはしばらくの間あひだそめる心こころになりたるが漸ぜん
 々にその心こころすみわたりて坐禪ざぜんのうち三分さんぶんが一いちそむ事こともありあるひは三分さんぶん
 が二にそむ事こともありあるひははじめをはりそみわたりて善惡ぜんあくの念ねんもおこら
 せ無記むまじの心こころにもならずはれたる秋あきのそらのごとくとぎたる鏡かがみを臺うたいにれせ
 たるがごとく心こころ虚空こくうにひとしくして沙界しゃがいむねのうちにあるがごとくおぼ

ぬて。そのむねのうちのそゞしき事。たどへていふべきやうもあくおぼゆる。事あり。これははや坐禪を過半成就せるそがたあり。これを禪宗にては。打成一片といひ。または一色邊といひ。大死底の人ともいひ。普賢の境界ともいふ。かやうの事しばらくもあれば。初心の人ははやさとりて。釋迦達磨にもひとしきかとおもへり。これ大あるあやまりなり。かくのごとくなりたる時を此第五の誦經といふ。楞嚴經に。湛入合湛は。識の邊際なりと説たまへるは。此事なり。世上につよく坐禪する人ありて。かやうの處を見つけては。はやさとりぞと心得て。臨濟徳山をもあざむき。われ本來の面目を得たり。本分の田地にいたれりとの、しり。人にもおほく印可し。棒を行し。喝を下し。祖師のふるまひをなそ。これはいまだ佛祖の内證をしらぎ。一心の根源にいたらざる人なり。いまだ此處までもいたらぎして。もろくの道理を心得てさとりとおもひあるひは。一切空なる處をさとりといひ。あるひは目口をうごかし手足をはたらかそものなど。さとりぞとて。人おもゆるそ人あり。これみなほるか

に佛祖の心にへだ、りたる人なり。いま此識にまよひて。さとりとおもへる人は。さやうのあさき心得の人には大あかはれり。眞實もあるゆへに。この處までは。修行しのぼるといへども。此識とこゆる事をしらぎして。識にまよひて。本心とそ。いまだ修行のいたらざる處ある故なり。楞嚴經にいはく。かくのごとく分別をべてなき時。色にあらぎ。空にあらぎ。拘舍離等がくらまえて。眞諦とそるも。もろくの法縁をはかれては。分別の性なしと。またいはく。たどひ見聞覺知と滅して。内に塵障をまもるも。なとこれ法塵分別の塵身ありといへり。古德釋して。この内に塵障をまもるところ。そこばくの賢聖を埋没しおはる。宋儒の喜怒哀樂の。いまだ發せざる時の。氣象を見るに。たゞ此うちにあり。老子の虚極を致静篤をまもるも。またたゞ此うちにあり。佛教の中乃阿羅漢辟支佛の入處の定。さとの處の果も。またたゞこのうちにありといへり。これみち見聞覺知の分別をはなれて。無念無心なる處をさして。佛も祖師もかくのごとく。のたまへり。無念無心にして。晴たるそらのごとくなる處は。衆

生の第八識とて。三界六道の迷をつくり出せる根本あり。この處よりして天地虚空。その中の有情非情のさまぐのしなを思ひ出せり。眠れる故にさまぐの夢を見るが如し。三界唯識と。佛の説たまふは。この義あり。また第八識の根身種子。器界を縁と云るも。此事なり。また楞嚴經に。陀那是微細乃識なり。習氣暴流を成せ。眞と非眞と迷はん事とをそれて。我つねに開演せせと。説給へり。古德釋して。佛も玄一向に眞と説たまは。衆生進修せせして。増上慢に墮せん。若一向に不眞と説給は。衆生自身と撥棄して。斷見を生せん。此故に。凡夫二乘に對しては。つねには説たまはせといへり。此識まことの本心に似てまた本心にてはなき故に。をろかなるものに向ては。容易には佛も説たまはず。その故は。此識を即ち眞實ぞと説たまは。衆生その處に留りて。もはや満足せりとおもひて。そんで修行せじ。もし眞にあらせと説たまは。衆生さては一向空にして。本心といふ事はなきかとおもひて。斷無の見におちて。眞實に本心をささる事あたはじ。まかる故に。此處大事にて。容易には佛も

説給はせといふ意あり。此識は全身本心なれども。無明の眼り着たる故に。そをばち本心とはいひがたし。本心とはいひがたけれども。またもろくの妄想は。はやさりてなき處なれば。一向の迷ひにてもなし。もし修行の人。此處へゆきつきなば。いよく精を出して。修行すべし。やがてまことのさどりのあらはるべき前相なり。たとへば夜のあけて日のいまだ出さる時のごとし。のやみははやはれぬれども。いかなる子細にて。かやうに開はれて。世界みなあきらかになりたりといふ事を。忘らせ。もし此やみのはれたるを見ては。や事は成就したりとて。さしをかば。日輪を見る事あたはじ。もし妄想乃やみはれて。むねのうちのあきらかに。そみわたりたるを見つけて。もはやさどりたりとおもひて。さしかば。般若の日輪は見る事あたはじ。妄想の開ははれぬれども。いまだ此處にてはなきぞと心得て。さてをきもせせ。またよろこびもせせ。さどりをまつ心もかく。たゞ無念無心にして。ひたどつとめ行ば。忽然として。眞實のさどりあらはれて。萬法をてらそ事。百千の日輪の。一度にいでた

まふがごとし。これを見性成佛ともいひ。大悟大徹ともあづけ。寂滅爲樂ともいへり。此時三世の諸佛に一時に對面し。釋迦達磨の骨髓をしり。一切衆生の本性を見。天地萬物の根源に徹す。そのよろこばしき事。たとへていふべきやうなし。此故に楞嚴の中には。淨きはまりてひかり通達す。寂照に虚空をふくむ。かへり來て世間を見れば。なを夢中の事のごとしといへり。此さとりひらけぬれば。大地虚空ことごとく。法性法身。寂照不二の躰にして。森羅萬象。一物として。わが本心にあらざるものなし。此故に楞嚴には。見も見縁も。現前の境に似たれども。本よりわが覺明ありといへり。見とは。わが六根の中の眼のひとつをわけて。余の五根をしらしむ。見縁とは。六塵の境界。一切萬法なり。これわが身も。萬法も。唯一の本心。妙覺明の躰なる事を説たまへり。これと大地を變じて。黄金となし。長河を攪て。酥酪となすといふ。これ眞實の極樂世界あり。むかし僧あり。雲門と問て。いはく不起一念の時如何。雲門云。須彌山。また僧あり。趙州に問。一物不將來の時如何。趙州いはく。放下着。僧いはく。一物もそで

佛のたまはく。方便の説をのぞいて。たゞ假名字をもて。衆生を引導したまふとなり。此迷かきのもじをもちゆる事。西天の梵文にことならせ。かるがもへに。聖德太子。綴照やの御との葉をもて。片岡の達磨大師にまみえたまひ。太子の御哥。まなてるやかた。おかやまに。いひにうゑてふせる。旅おほき。み人哀おやなし。達磨御返し。班鳩は。富の小河。乃た。おはこそ。わがおは。わそれめ。嵯峨の皇后山。のあなた。の和哥をつらねて。もろこしの。鹽官國師に。かなひたまふ。桶のき。さき。嘉智子の哥。もろこしの。山のあなたに。のは。をたまはりて。もろこしに。わたりて。ゑんぐは。んの。齊安國師につぐ。こくし。賞歎して。佛心印をつたふ。その弟子。義空禪師を。まねきて。檀林寺を。たてたまへり。このくには。はじめ。これみ。権化垂迹。乃。外。の。文字をしめ。そなり。されば。禪宗を。はじめ。て。此國につたはりて。より。この。かた。大和。言葉をもて。必要を。の。ふる。人。いくは。く。なし。わづか。に。た。無住。禪師の。沙石集。夢窓國師。乃。夢。中。問。答。の。書。のみ。なり。其。外。あ。また。あれ。ど。み。な。こ。ゑ。ま。と。る。なる。物。

に將來らぎ。この何をか放下せんと。趙州いはく。放下ならば擔取しされど。その僧言下にをいて大悟。あるひは不起一念といひ。一物不將來といふ。みかかの無念無心の田地にいたれる僧あり。此處をさとりぞと心得て。雲門にどひ。趙州にどふ。これ病なる事をしりて。かくのごとく答へられしなり。此須彌山。放下着を透得せば。はじめて本分の田地にいたり。雲門趙州に相見そべし。よくく工夫。まて。田地あいたるべま。此故に古人いはく。懸崖に手を撒して。みづからうけがつて承當そべし。絶後にふた、びよみかへらば。君をわさむく事を得じといひ。また百尺の竿頭に一步をそくめ。十方世界に全身を現せといへる。みな此さどりのあらはる、時の事なり。よくく坐禪工夫して。此境界にいたるべし。あやまりて野狐の窟に入事なかれ。

にもわらぎ。爰に三百余とせの後。津の國。難波の瑞龍寺。開山鉄眼和尚といふ知識あり。ふかく黄蘗の堂奥にいたりて。木庵和尚にしたがひ。臨濟三世の法燈をか、げそへて。元禪師の眞孫とさこゆ。もとより禪教ともに通じて。説法花を感るばかりになん。わか、りしむかしより。大藏の金文をささむ事を願とそ。此國 欽明の御時。百濟よりはじめて。佛經をわたせり。ついで 聖徳太子弘たまふ。又應永の末つかた。足利の將軍義持。藏板を朝鮮にもとめて。まきりに此國につたへんと。それども得がたく。つゝに全藏の板をそなへせ。今に至まで。鏤刻の功をはげむ人あり。實に此國法寶をかけり。此故に師常に曰く。傳へ聞もろこしには。廿余萬の藏板ありて。或は官庫に安置し。あるひは名盡に鎮護し。あまねく世にひろめ。はるかに此國にをよぼして。今にたゆる事なし。此國もとより佛法をうやまふ事。眞域にをどらぎといへども。只此寶藏をながく傳ふる事。あたはせ。たれかこれをうらみざらむや。卽幸にうれしくも。太平の世にむまれて。桑門の身をやそ

んぞ國恩こくおんなにをもてかむくひん。こゝにおいて力をつものり志こゝろざしをはこびて所ところくに講筵こうぎんをひらき專まことに修善しゆぜんをそゝむ。國くにこぞりて化けをしたひ。其徳そのとくになつく事佛ことほとけにことあらせ。つゐに十ととせあまり三みとせをへて天和てんわ乃なはじめ專ことをはりぬ。たづぬるにそのかみ。元祖げんそ師し渡海わたうみの時將來ときしやうらいの唐本たうほんを印板いんばんの爲ためにさづけらる。上足じやうそく龍溪りゆうけい禪師ぜんし。隨喜ずいき讚歎さんたんしてあゝろざしをつのらしむ。又また唐僧たうそう大眉たいめい和尚わしやうといへるあり。ぞめる所ところの東林とうりんとちづけし。幽邃ゆうすいの地ちをかへて。藥山やくざん今の寶藏院ほうざういんとちさしむ。そのく薩埵さつた乃な悲願ひがんに乗のりじて。力をあはされしいとたふとし。木庵もくあん和尚わしやうのいはく。此國このくに今いま禪門ぜんもん乃な中ちゆうに經論きやうろんを圓解えんげして。大おほいに佛心ぶつしん宗しゆうをおこそものは。ひとりなんぢ乃なみ。正法しやうほうを現世げんせに傳つたへて。寶祚ほうそを千秋せんしゅうに祈いのり奉たてまつらんは。只ただ此法このほう貨ばうの功力くりきに過すべからせ。よろしく弘通くわつうをべしとて。したしく許可きよかしたまへり。とぞ。これより年月としつきまそくくつとめて。功こうをどぐ。いよく其名そのなかくる。に所ところなし。延寶えんぼう六むとせ。文中ぶつちゆうのちぬかつ。ぬに此事このこといとちかしく。仙院せんいんに聞きこぬあけて。表へうをすゝめて奉たてまつるべきよ。

しになりぬ。あまつさへあふみの國勅願くにちくぐわんの御寺みでら。正明しやうめい乃な道場だうじやうに御經みきやうをおさめたまへり。まことに三寶さんぼうをあがめましまそ事こと。聖徳せいとく清和せいわのひかしにつぎ。漢明かんめい梁武りやうぶの跡あとにもこゑさせたまひけり。しかありてとをく東あづまにくだり。大樹たいじゆに達たつしたてまつると。とかくする程ほどにはやく他方たほうを化くわせんどの終しゆうにやありけん。其事そのこと半はんなるに難波なんばに歸かへりのばりて。明あきるやよひの末すへ乃な二日にち。涅槃ねはんと示しめしたまふ。其哀惜そのあいきんのあまり。兜樹たうじゆの坊ぼくにおもむくもの。をほよそ十萬人じゆばんにんにあまれり。世よにまれなる事ことと聞きこぬ侍はんべりし。ひとり受業うじやうの高弟かうてい寶洲ほうしゅう和尚わしやうをとめて。今いま瑞龍ずいりゆうの禪席ぜんせきをあたゝめて。さかんに説法せつぽうおこはる。事こと又また他にことなり。されば帥しの願心ぐわんしんやふかく龍天りゆうてんの加護かごやむなしからざりけん。滅後めつごそでに十ととせの頃ころ。おもはざるに關東くわんとうに聽達ちやうたつし。大樹たいじゆより瑞龍ずいりゆうの二代だいにに命めいじて。請經しやうきやうあるべきのよし。ことさらに侍從しやうじゆう信興しんきやうにつたへさせたまふ。國くにの大夫たいふ人びとも又またついで請しやうせられしかば。いよく法門ほふもんのかゝやきをましぬ。おもふに佛ほとけをあがめ。法ほふに歸依きいまたまふと。國家こくが永久えいきうのまもり。萬

民快樂の基なり。生前といひ。滅後といひ。大功またくとげ。そく願みちぬるかな。先に遺録二まきをあつめて。梓にいのちながうそ。此法語は。かつてひどりの女人の。禪にこゝろざしふかきが爲ふ。かきつゝられしものあり。ゆる人いはく。幸に此書あり。あらたにうつしてうばそ。こうばいにはどこして。同志のいままめとなせど。此いさめにまかせて。つとめて筆をうめ。いさゝかそのあらましを。與あしるものからし。こひねがはくは見る人きく人。はやく坐禪の道をまあびて。ことく邪見の林をいで。西來の祖意を悟り。東流の正脈を。ひなしうせざれといふことしかり。

みをつくしたてしちかひもみつ盤に

くちぬなにはの寺そさかゆく

かしてまな空とふ鳥の跡とめて

教の外の法のをしへは

か、けても見せはや人に末の世を

あまねくてらそ法の燈

元祿四とせかのとのひつじの秋

は月の末の二日

弟子のうばそくそれがし

つ、しみてこれをしるそ

明治廿六年七月一日印刷

明治廿六年七月八日發行

金五錢

著者 故人 鏡眼和尙

京都市上京區木屋町通二條下ル廿番戶ノ内一號

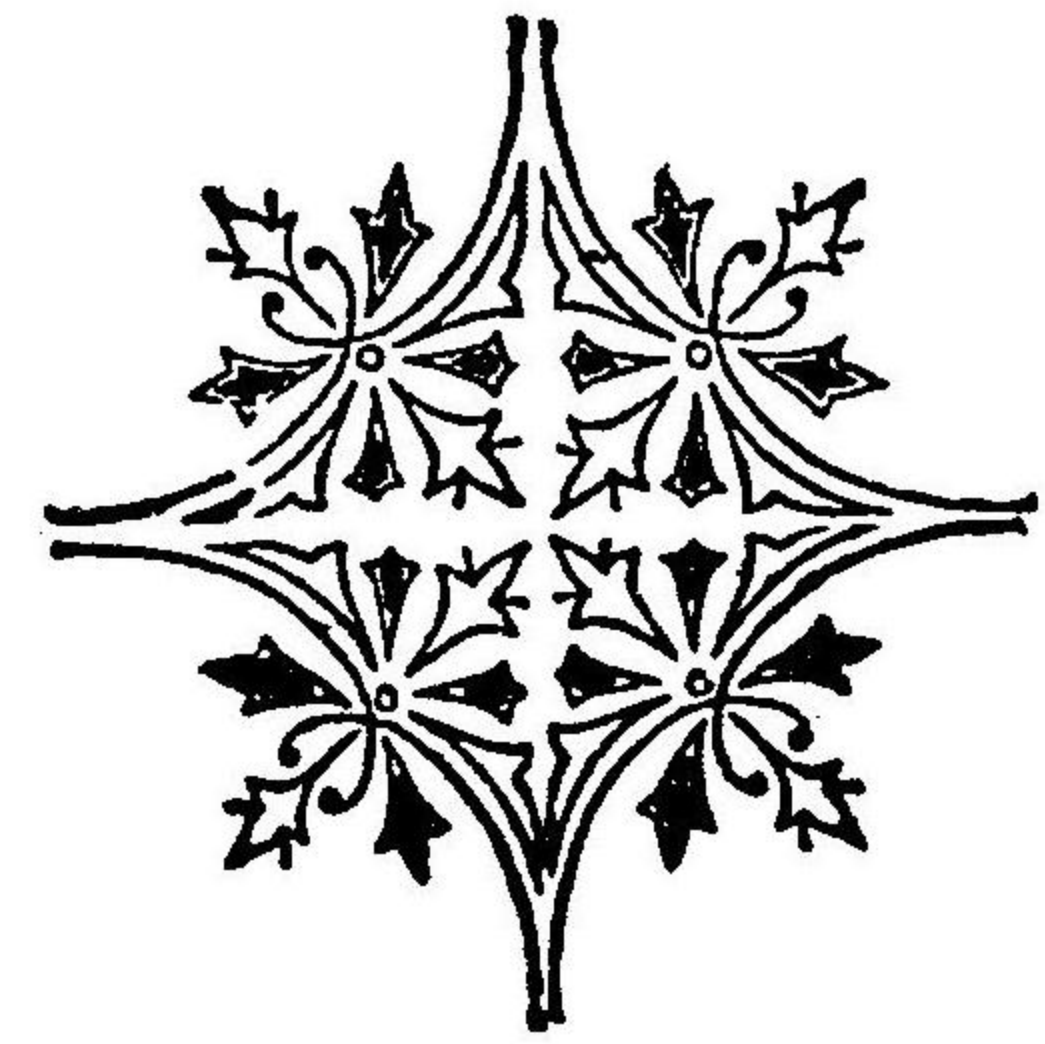
發行者 河村泰太郎

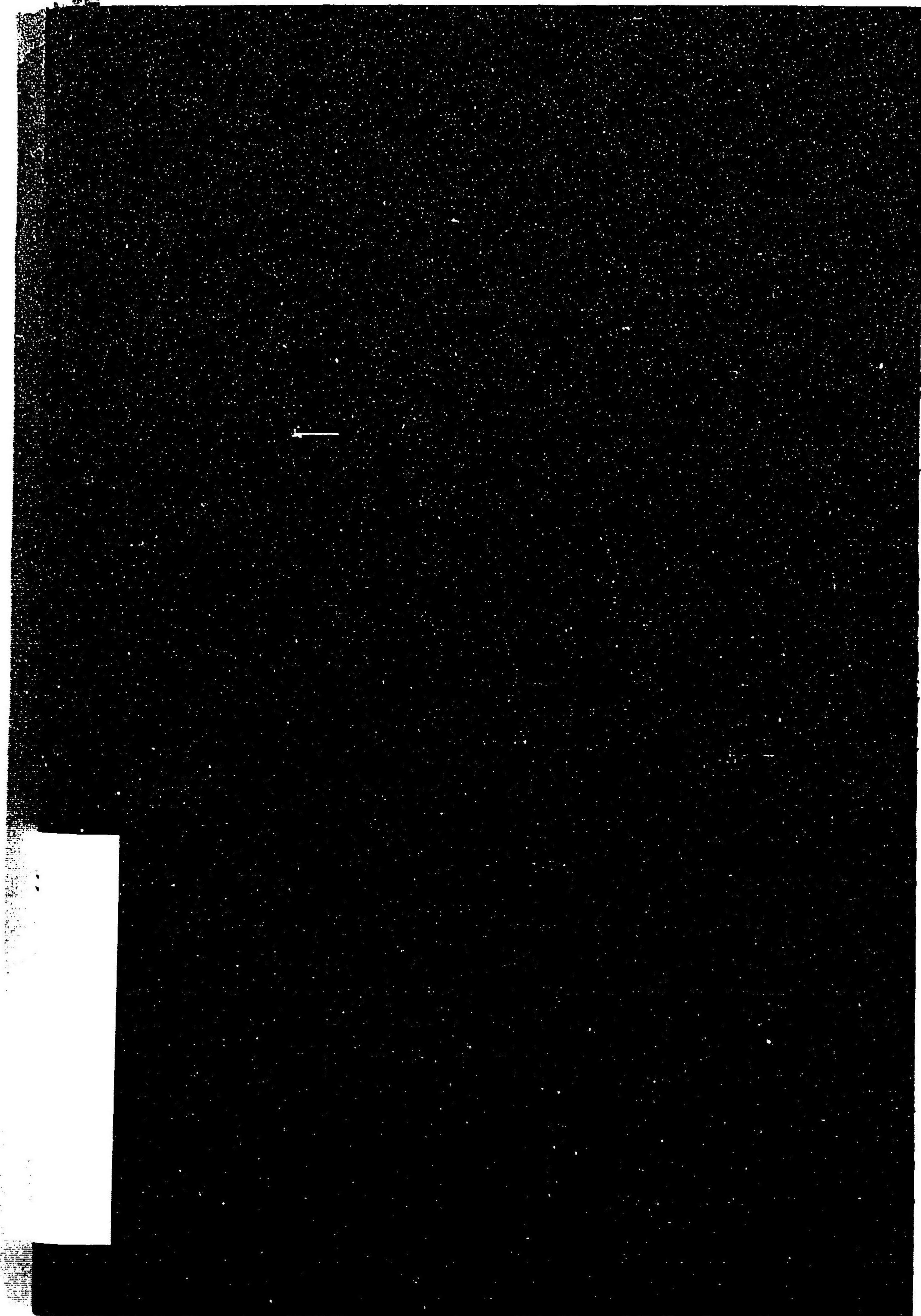
大阪市西區靱下通壹丁目四十八番屋敷二成舍

印刷者 瀨戶清次郎

發行所 一切經印房

京都市上京區木屋町通二條下ル





特43

851

仮字法語

国立国会図書館

019389-000-1

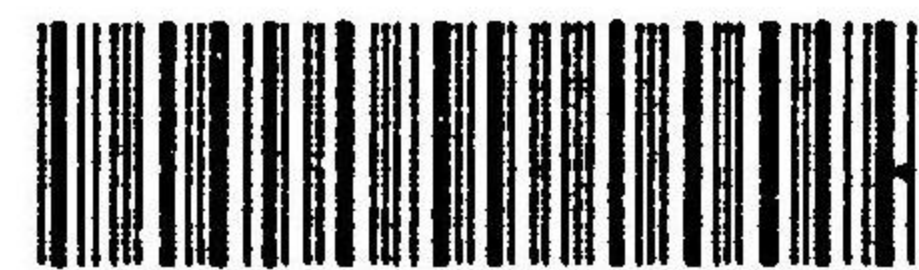
特46-851

仮字法語

鉄眠和尚／著

M26.7

ABG-0089



019389-000-1